

医科学教育部

I	教育水準	教育 4-2
II	質の向上度	教育 4-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、医科学、医学、プロテオミクス医科学の 3 専攻があり、定員は、修士課程 20 名、博士課程（一貫）64 名（医学専攻 46 名、プロテオミクス医科学専攻 18 名）である。専任教員数及び学生対教員比は、医科学専攻 163 名と 0.2、医学専攻 125 名と 1.2、プロテオミクス医科学専攻 35 名と 1.5 であり、研究指導教員数はそれぞれ 45 名、31 名、13 名である。豊富な教員数を擁しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、教育研究委員会及び医科学・栄養生命科学・保健科学・口腔科学・薬科学の 5 教育部の協力組織「医療教育開発センター」の指導體制を構築し、ファカルティ・ディベロップメント (FD)、共通科目の検討、専攻間の調整を行い、授業評価の統一化、5 教育部共通科目の見直しを行っている。また、国費外国人留学生のための競争資金「統合医療学際教育英語プログラム」の獲得、e-learning 自己学習システムの開発、2007TOKUSHIMA BIOSCIENCE COE RETREAT PROGRAM による異職種間医療人教育に取り組み、教育内容（5 教育部共通科目の設置）、教育方法（シラバス・受講票の電子化、e-learning による社会人院生の教育環境整備）、教育環境の整備（国費海外留学生の配置、異なる職種間の交流リトリート）などの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、医科学教育部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、医科学教育部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、医学・生命科学の基礎コース（ヒューマンサイエンス、臨床医学概論、生命倫理入門）に各専攻科目を配し、特色として医療現場でのチーム医療を念頭にいた課程設定、社会人大学院生のため授業の夜間開講、外国人教員によるコミュニケーション特論、チーム医療のための異職種合同教育課程等の工夫をしているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、大学院生による授業評価の導入、履修登録様式を共通化して5教育部間の科目履修の促進、社会人院生のための夜間授業の開講、外国人留学生に対する英語授業の開講、社会的要請である生命倫理入門（必修）と臨床心理学（選択）を開講しているなどの工夫をしており、相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医科学教育部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、医科学教育部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、授業（講義、演習、実験、実習）と研究指導が組み合わせられ、個別実験指導と少人数研究報告会、対話討論方式、セミナー形式がとられている。また、無線LANを構築しe-learningによる自己学習システムが整備され、リサーチ・アシスタント（RA）やティーチング・アシスタント（TA）として研究支援、教育支援を通して専門科目の学習促進のみでなく境界領域の学習やコミュニケーション能力の学習の機会を与えているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水

準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、ほとんどの授業で課題設定があり、自主研究・調査に関するレポート提出と公開のプレゼンテーションにより研究室全教員からの評価・指導が行われている。異職種間の交流が図れるリトリートも主体的学習に貢献しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医科学教育部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、医科学教育部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、研究能力の点で、博士論文の大部分が国際誌に掲載され（平成 19 年度 173 件）、大学院生の学会発表件数が 17～19 年度の間急速に増加している（平成 19 年度国内発表 601 件、国際発表 100 件）。また、医科学修士課程ではほとんどが 2 年間で修了、学位を取得しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、平成 18 年 3 月でのアンケート調査では 55-59%が「満足」・「やや満足」であったが、平成 20 年 3 月のアンケート調査では 67%が「満足」・「やや満足」であり、概ね学生からの評価が改善しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医科学教育部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、医科学教育部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、大学院修士課程医科学修了者の 22%は大学院博士課程へ進学、78%が医療福祉関係、教育学習支援分野等へ就職しており、良好な進路結果である。博士課程修了者では、就職率が低い傾向があるが、平成 18 年度修了者の 78%がヘルスバイオサイエンス研究部、附属病院、地域の病院等に就職しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、徳大関係医療機関協議会総会における地域医療機関責任者からの概評として「高い評価」があるとの記載があるが客観的評価の根拠資料はなく、大学院修了者の就職先からの評価については提出された現況調査表からは不明である。しかし、平成 20 年 3 月の指導教員へのアンケート調査では、84%が「満足」・「非常に満足」と評価されているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医科学教育部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、医科学教育部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が2件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が2件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。